

平成 19 年 12 月 31 日

草の根技術協力事業 モニタリングシート(平成 19 年度第 3 四半期) ※電子データも提出してください。

PDM(なれば
案件概要票)
からプロジェクト目標、
成果、活動を転記する。

1. 対象国名・事業名	スリランカ コットマレー地域の小農民によるアラビカコーヒー栽培のコミュニティ開発		
2. 事業実施団体名	特定非営利活動法人日本フェアトレード委員会		
3. 事業実施期間	平成 19 年 9 月 1 日から平成 22 年 3 月 31 日		
プロジェクト目標	コーヒー豆の選別と乾燥・調整に必要な資機材が整い、アラビカ種の生産環境と体制が整う。		
成果1 活動1-1 事業に対する理解・協力を得るための広報活動	<p>活動実績</p> <p>日本国内においては、2 度の報告会活動を熊本市国際交流会館で報告会を行った。 10 月 23 日熊本市国際交流会館で 13 人の参加。参加者には JICA 九州から本事業担当者と熊本県内の JICA 関係者、熊本県国際課、熊本市国際交流振興事業団の関係者への主な報告会だった。 11 月 9 日一般向けの国内報告会を行った。30 人を超える参加者があった。参考までに、別添の要領のチラシを作成。</p> <p>報告書として、2 つのレポートを作成。</p> <p>1 「スリランカコーヒープロジェクト報告書」 JICA スリランカと JICA 九州には、40P の報告書をプリントして提出済み。 幻のコーヒー現地の様子やコーヒー苗の生育など、本プロジェクトが歩んだ生産現地を中心とした報告書になっている。</p> <p>2 「幻のコーヒーを訪ねて報告書」 報告会でのみのプレゼンテーション。スリランカに限らず、コーヒーを中心にフェアトレードとは何か? に力点をおいて、まとめたものである。</p>		<p>特記事項(計画通りにいかなかつた理由・問題点・注目点)</p> <ul style="list-style-type: none"> 今回、農業生産者の生産意欲を感じた。そして、現在実際にコーヒー豆が生産され始めているが、その豆の味や品質の吟味を始めることがある。 <p>カウンターパートナーにコーヒー品質について、これからセミナーをして、品質への理解を深めたいと考える。</p>

活動1－2 アラビカコーヒーの有利さとカウンターパートナーのアラビカコーヒー苗植えが始まった。	<p>11月24日のコットマレーの農民集会に参加した。仏教お寺の中の集会場でおこなわれた。私たちプロジェクトの紹介と私たちプロジェクトから、農民への日本からごあいさつと激励のメッセージをおこなった。</p> <p>また、村びとの農家からは、自分たちが生産し収穫したコーヒー豆を見てくれと、誇らしげに、恥ずかしそうな表情とがりまじっていた。その豆は赤いアラビカの完熟豆だった。</p> <p>さらに、カウンターパートナーが計画したセレモニーとして、コーヒー苗の贈呈式があった。私たち日本人プロジェクトから農民に直接手渡しを行うことだった。(写真)</p> <p>以上のような活動を通しての農民とカウンターパートナー農業輸出局における成果は、一見当然のように見えるが、実はスリランカの田舎の農民にとって重要な成果であると思う。</p> <p>成果ー1 カウンターパートナーの農業輸出局が、アラビカコーヒーが高い価格で販売できると認識したこと。</p> <p>成果ー2 村びとの現在のコーヒーでは生産は生活向上には足りない。農民のもっとコーヒー生産量の増産のために、コーヒー苗を農民に渡す計画を持った。</p> <p>成果ー3 コーヒー苗を支給されたカウンターパートナーと村人の生産意欲を感じた。</p> <p>カウンターパートナー輸出農業局から農民に、義務みたいに渡すのではなく、私たちからコーヒーを渡すセレモニーもある種彼らの意識付けや生産モチベーションの成長とも言える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・コットマレー農民との交流を何度か行っているが、彼らのデヘミ農民組織について、未だ見えないところがある。 彼らのいう農民組合について私たちは、理解する活動が必要である。 現在はすこぶる小さい農家単位で行動しているために、本来の農業の自主、自治が育たない。次にその意味でも農民組合についての調査が必要である。
---	---	---

四半期振り返りコメント(団体)

第3四半期は、カウンターパートナーと私たちプロジェクトが共同してどのような仕事に取り組むかが、これから課題である。ただ、彼らのモチベーションは、高くなっているのは、間違いない。そこで、これからさらに専門化した技術を導入すべく取り組みに変わっていく。

1つは、農家のコーヒー豆の生産モチベーションと豆の品質確保である。それについては、活動の項目で述べたように、一定の成果があるようと思われる。しかし、これは長期的スタンスでみると、これから苗から、手入れなどの専門の技術が必要だと思う。

2つめの仕事は、活動の成果には表していないが、コーヒー加工工場についてである

場所はコットマレーのお寺の敷地内を確保されている。工場建設は、工場製作専門業者により、現在工場機械が製作されつつある段階である。

しかし、コーヒー工場はコーヒー豆が樹から収穫され、どのようなプロセスをたどって、生豆になるかがスリランカ農業省関係者にも理解されていない。

そこで、実際のコーヒー豆をもって、フローチャートで説明して、コーヒー豆になることを農業輸出局関係者にももっと説明が必要である。

今回のモニター報告は、第2四半期での報告では、実際にプロジェクトが始まったのが、9月からであった。そこで今期のプロジェクト目標は第2四半期報告と若干重複しているところもあると思う。ただ、できるだけ重複は避け、新たな活動や成果を織り込みながら、そして今回の第3四半期の後半部を意識した報告書である。

在外コメント

少しずつ、でも着実に農民や農業輸出局スタッフのモチベーションに変化が見られていることは大変喜ばしい。実際に良質なコーヒー豆を生産し、販売し、収入が向上するまでは半信半疑な農民もいるのかもしれないが、根気強く指導をしていただきたい。

農業輸出局スタッフは、コーヒーの加工に関しては経験が不足しているため、口頭での説明のみで理解させることは困難と思われる。例えばセミナーなどを開催し、ビデオ等の映像で紹介することや、場合によっては状況の似かよった他のコーヒー生産国があるのであれば、カウンターパートを研修に連れて行き、関係者との意見交換を行うことも1つのアイデアと思われる。

国内機関コメント

本事業開始がきっかけとなり、農業輸出局より対象地農民へコーヒー苗木が贈呈されたことは、本事業が行政と協力して行われることを農民に意識づける好機となった。

また、本四半期ではデヘミ(DEHIMI)農民組合について言及されているが、同組合との連携を期待したい。当初の事業提案書で提示された上位目標は「現地生産組織による自立した生産活動の定着」であり、同目標達成のための活動として、既存の現地組合である DEHIMI の活用が計画されていた。同組合の把握と活用は、事業の効率化、自立・継続化を図るための鍵となると思われる。在外事務所からも、組織化を通じた能力強化は不可欠とのコメントがあり、実施団体、カウンターパート機関、在外事務所、国内機関等関係者が共通意識をもって、事業に臨んでいくよう努めたい。

【活動写真】

11/24 コットマレーの農民集会にて、当該事業の紹介



コーヒー苗贈呈式



農民が生産したアラビカ完熟豆

